

## 『ボーダレス化を共有する宗教と商業』

三島 禎子 (国立民族学博物館)

グローバル化時代といわれる今日、さまざまなボーダレス現象が生じている。それは国民国家をはじめとする民族や社会などの既存の制度や装置を揺るがす脅威として、あるいは文化や宗教などにみられるイデオロギーの転換として認められる。しかしながら、ボーダレス現象は同時に、既存のボーダーの強化や、新しいボーダーの創生をも意味する。すなわち、ボーダレス化はボーダーのあるところに葛藤を生み出すだけでなく、さまざまな現象の有機的なつながりや新しい関係性を構築する可能性を秘めているのである。

本講義では、このような多角的な視点に立ち、ボーダレス現象として大きく注目される人の移動について考える。具体的には西アフリカに故地をもつソニンケという移動民をとりあげ、ソニンケにとっての移動とは何であったか、それが外部世界からどのような意味を付与されたかという点を整理する作業をつうじて、ボーダレス現象の再評価をおこなってみたい。

講義のポイントは以下のとおりである。

1. フランスの移民社会における「出稼ぎ民」としてのソニンケ
2. 古代西アフリカ史における「商業民」としてのソニンケ
3. 「商業民」から「出稼ぎ民」となった植民地時代におけるソニンケ
4. 「国際ビジネスマン」としての現代のソニンケ

これらの点をとおして、古代西アフリカの経済の中核を担ったソニンケが、宗教ネットワークを利用しながら商業網の拡大を実現したこと、それが移民研究という限定された枠組みのなかでは異なった意味づけを与えられたことが明らかになる。

人の移動にみられる諸民族間の相互行為として宗教は大きな役割をもっているが、現代社会において宗教は他者に対する排他的な傾向ばかりが強調され、ボーダレス化がもたらす葛藤の最たる事例とみなされがちである。一方、商業は複数の共同体間における人の移動によって大きな利益を享受するが、自己の共同体を出て未知なる領域へと旅立つには利益欲求以外の心の支えが必要である。それに対して、宗教は絶対者の加護を商人に与え、その教えは移動する人によってさらに広まってゆく。このような商業ネットワークと宗教ネットワークの相互補完的な関係こそ、ボーダレス社会を有機的に構築する基盤になるのではないかと考えられる。

### 参考文献

- 三島禎子「出稼ぎ労働者と地域社会－セネガル河上流域の変容－」小倉充夫編『国際移動論－移民・移動の国際社会学－』三嶺書房、1992、pp.67-94.
- 三島禎子「国際移動と地域開発－ソニンケ移民に関する移動の主体性についての考察－」加納弘勝・小倉充夫編『変貌する「第三世界」と国際社会』東京大学出版会、2002、pp.195-221.
- 三島禎子「ソニンケにとってのディアスポラ－アジアへの移動と経済活動の実態－」『国立民族学博物館研究報告』27(1)：pp.121-157、2002.